

「本来の面目」

寺子屋プロジェクト和尚さんのお話 第12回：「本来の面目」

竺園寺は、京都の大徳寺をご本山と仰ぐお寺でございます。

その大徳寺の開山様は大燈国師です。

大燈国師は、花園法皇や後醍醐天皇などに帰依をされていましたが、その花園法皇の後様に、禅を指導された事が『仮名法語』に記されています。

大燈国師は、禅の初心者には、坐禅を専一に「父母未生以前、本来の面目」を見るものであると指導されていました。

「父母未生以前」とは、父母がまだ生まれず、自分の未だ人の形を形成していないその以前の事です。

「本来の面目」とは、もともとの顔かたちという事ですが、「面目」には「あり様」という意味もあり、「根源の在り様」という意味にも取れます。

つまり、「人間になる前の自分の根源の在り様は何なのか」という問いかけになるのです。大燈国師は、それを「虚空のようなもの」といいます。

「虚空」とは、『禅学大辞典』では「般若の実体。天空」とありますが、『広辞苑』には、「そら。大空」とあります。

芥川賞作家で禅僧の玄侑宗久師は、『「いのち」のままに』のあとがきに、

私は「サテイ」（気づき）の主体を「私」という「雲」の遥か上空の「天空」とか「青空」と表現したのです。

普段の「私」は「雲」ですが、瞑想する主体はあくまでも深くて広くて変わらない「青空」なのです。

「いのち」に宿った暫定的な「私」を消すことは、「青空」に「雲」がなくなるようなものです。

いや、どんな雲が浮かんでいても青空は気にしていない、と言ったほうがいいでしょうか。

と書いています。

坐禅をして瞑想している時の「私」は「青空」であるといいます。

その「青空」である「私」が普段の欲と感情に振り回されている煩惱の雲である「私」を深くて広くて変わらない心で見ているとあるのです。

煩惱の雲の「私」は、妄念渦巻く地上の現実には苦しみのたうち回るだけではありません。深くて広い変わらない「青空」の一部であることを知らなくてはならないのです。

その「青空」から煩惱にのたうち回る雲も深くて広い変わらない大空の風景であることを見るのです。

「本来の面目」は、もとは、中国の禅宗六祖、慧能禅師の説法集、「六祖壇経」に由来します。

中国、唐の時代、禅宗五祖である弘忍禅師は、行者として働いていた慧能の悟りを認め、法を嗣ぐ者として衣鉢を与えて逃がします。

しかし、おおぜいの弟子たちが、あんな俗人に達磨伝来の衣鉢（袈裟と鉄鉢）を持って行かれてはと慧能を追いかけます。

軍人出身で足の速かった明上座（みょうじょうざ）と言うお弟子が、江西省と広東省の境目である山脈にある大庾嶺（だいゆれい）で、慧能に追いつきます。

このとき、慧能は、衣鉢を石の上において「袈裟は力であらそうものではない。持って行きなさい。」と言います。

しかし、明上座は、「袈裟を奪いにきたのではない。どうか法を教えて頂きたい。」と答えたと言います。

その時に、慧能が明上座に問いかけたのが、

「不思善不思悪、我に明上座が父母未生時の本来面目を還し来れ」です。

善悪、好悪、美醜など価値観の比較衡量を離れて人間である以前の、明上座の根源の在り様はどんなものか？ と問いかけたのです。

この言葉に明上座は、はっと気づきました。

六祖慧能禅師は、衣鉢どころではない、今自分が着ている衣を脱ぎ捨てて、さらに人間の皮すら脱ぎ捨てて、存在の根源を見よと突き付けてきます。

そこを見る事が法を得る事であるというのです。

私は、40歳で会社を辞め、得度して道場の入門の試練を受けました。

修行道場に入門する時の試練の一つに一日中、食事時間を除いて、玄関脇の暗い部屋で一人坐禅をする事がありました。

坐禅をしていても、妄念が壊れた水道のように湧いてきます。

会社を辞め、道場に入門をまだしていません。無職です。

何か作ったり出来たりするような資格も技術も運転免許くらいしかありません。

財産は、家を出る時、家に置いてきました。

お金もありません。仕事も技術も何もかも無い40歳の体力しかない人間です。

自分が何者でもなく何物をも持っていない事に怖れを抱いてしまいました。

入門を許されてからもその怖れはつきまといました。

やる事なす事、気持ちばかり焦って結果が伴わず、空回りばかりしていました。

空回りの生活の中、修行道場の坐禅が救いでした。

何者でもない事も思わず、何物も持っていない事も思わず、すべてから解放されて呼吸だけに念を合わせるのです。

自分にも仏と同じ心の働きがあると知ることができたのは、入門してからです。

眼では見、耳では聞き、鼻では嗅ぐ。

手は持つ事が、足は歩く事ができるのです。

空っぽである事は怖れではなく、解放だったのです。

大燈国師は、ただ坐るのが坐禅ではなく、日常の生活が、坐禅だと教えます。

日常生活、行住坐臥において、念を払って、念をしずめ、「本来の面目」に出会うように、勤める事が坐禅なのです。

当寺に一本の老梅があります。

斜めに低く龍が潜むように幹が伸びて、ところどころ、洞（うろ）になっているのがおもしろく、目を惹く老梅です。

訪れる檀家の方にも時おりほめてもらい、植木師に頼んで洞のところがこれ以上いたまなないように手入れしてもらうなど、常々家人にも大事にすると言ってきた木です。

あるとき、その梅の木の下落ち葉を、腰を屈めて掃除していると、家人がすぐそばの縁側から「住職、電話です。」と声を掛けてきました。

「はいっ」と立ち上がろうとするとその大事にしていた老梅の幹に頭をぶつけてしまい

ました。

最初は、老梅の枝が折れてしまわないかと心配した記憶があります。

次に、痛みがじわりと感じられると、怒りの感情が湧いて出てくるのが分かりました。

タオルを頭に巻いていましたので傷にはならなかったのですが、勃然として脳に言葉が紡がれ始めました。

「危ない」自分が危ないだけでなく、お参り来られた方も危ないのではないか。

「住職として見過ごすことはできない。」言い訳の自己防衛の言葉が浮かびます。

「切ってしまおう。」と言う思いがよぎりました。

この言葉を家人に聞かれました。

「いつもこの木のこと、大事にするって言っていたのに、変わっちゃったの。」

家人の蔑むような目を見て、頭をぶつける前の自分を思い出しました。

一連の心の動きを思い出すと、欲と感情に言い訳の言葉を与える「雲」の働きが見えてきました。煩惱の「雲」の動きが見えたのです。

ただ残念だったのは、家人の言葉を聞いてからの気づきだったことです。

「青空」の「私」は、まだいません。

気づいて初めて「青空」から煩惱の「雲」の「私」を俯瞰して見たというのが残念です。

正岡子規の有名な絶句に、

「へちま咲いて 痰のつまりし 仏かな」

があります。

死期が近く、痰がきれずに苦しんでいる子規自身の姿を、何の感情も欲もなく、子規自身が俯瞰して見えています。

苦しみのままに仏となり、見るのです。

「雲」の「私」を「深くて広い変わらない青空」の「私」が見ているのです。

大燈国師が、「虚空のようなもの」といった「本来の面目」は、この深くて広い変わらない青空、大空の「私」なのかもしれません。

普段、煩惱の「雲」の「私」は、地上の欲や感情に振り回され苦しんでいます。

その「雲」のままの「私」が、坐禅によって「雲」は、「青空」の一部なのだを知る事が、深くて広い変わらぬ「私」に還る一歩になるのです。

(文責 中村彰利)